

希望と絶望の先に

山本 麻友美(京都芸術センター プログラム・ディレクター)

技術の進歩に対する憧れと危機感、機械に対する希望と絶望、それらの相反する感情が創作の背景にあるのだろうと、國府理さんの作品については感じていました。そしてそれは、とてもシンプルではあるけれど、忘れてはいけない大切なことであるということを思い知らされる経験を、國府さんの作品を通して、また同時に現実の世界でも、私は何度も繰り返しています。《水中エンジン》を見た時の衝撃は特に強烈なものでした。

2012年の夏、京都芸術センターで國府理さんの個展『ここから、何処かへ』を開催しました。國府さんのことで、もっとも強く印象に残っているのは、実は搬入時の姿です。搬入は、誰もが追い詰められているからか、アーティストの性格や個性が色濃く表れる作業であると思います。國府さんの搬入は、それまでのどのアーティストとも違って、たったひとりで、大きなものも、重いものも運んで組み立てていくことができるように設計されていました。単純に、人をお願いをしたり、説明をしたりするのが苦手という側面もあったのかしれないと想像しますが、それ以上に、自分がやりたいことを自分自身で実現するための工夫が随所にあることに感動しました。作品をすることで精一杯、という若いアーティストが多い中、搬入作業をこれほどまでにクリエイティブにすすめられる人を見ることがありません。問題を解決しようとしたらこうなっただけと、國府さんは笑うかもしれませんが。

國府さんは、たった一人で全てを成し遂げようとする孤高の人でした。人に頼らずになんでも自分でしてしまう姿には、他人に立ち入られたくないという神経質さではなく、誰にも迷惑をかけず自分の好きなことに集中したい、という周囲への配慮と自分自身の欲求に対する正直さを感じました。そして、その姿勢は、作品にも少なからず現れていると思っています。自分の表現したいこと、作りたいものに貪欲で、正直なところ。きっと黙々とひとりで作業に没頭する姿を多くの方が目撃しているはずです。

技術がなんのためにあるのか。國府さんの手は、ものを作ることの喜びを知っている人の手でした。ものを作る喜び、何かを生み出す楽しみ、それらを知っている人は強い。その先にあるものを、もう少し一緒に見たかったし、見せてほしかった。ただ、この空洞と疑問を、ずっと忘れずにいようと今は思います。